

PICK UP BRAND

OZ
RACING

F1(1984-2021年)、WEC、Formula-Eをはじめとする世界のトップカテゴリーレースで長年愛用されているOZがレースホイールを作るときと同じプロセスで究極のホイールをつくりあげたポルシェにはディーラーオプションでマグネシウム鍛造ホイールがあるがさらに軽量で剛性があり、バリューあるプライスとなっているのがOZ製の特長である

文＝堀見 誠



「究極」と名付けられた至高の逸品

ポルシェ 911 は市販モデルであってもそのままの状態です。ストリートを走ってなんら不満を覚えることなく、そのままサーキットへとおもむき、タイヤの内圧さえ調整したら全力でサーキット走行できる。それこそが911の特長といっている。

しかし、トップレンジに位置するGT2やGT3、GT3 RSなどは、あくまでもサーキット走行に特化した、究極のマシンである。ストリートを心地よく走ることはな

く、サーキットのラップタイムをいかに短縮するかに重きが置かれた究極の911である。

これらの特別な911の足もとを飾るに相応しいのは、やはり究極のホイールでなければいけない。

イタリアを本拠とするOZは、古くからレースに勝つためのホイールをつくり続けてきた。このOZが991 GT2 RSと992 GT3 RS用として、マグネシウムを素材とした鍛造1ピースホイールを開発した。それが「Ultimate Magnesio (ウルティメイト・マグネシオ)」である。カラーリングはグリジオ コルサ プライトという、つまりはシルバー系統のみをラインナップするこのホイールは、限定生産品。サイズバリエーションは20×9.5J 50と21×12.5J 48が用意されており、イタリア本国で販売が開始されたばかりのホットなホイールだ。日本では近日受注が開始される予定となっている。

さらに注目したいのは、このウルティメイト・マグネシオの開発段階で新たに採用された研究開発技術や生産工程の最適化を活かした、アルミニウム鍛造1ピースモデルとしてつくられた「Ultimate Alu

(ウルティメイト・アル)」だ。991と992、718ケイマンGT4RS用として販売されるこのホイールは、豊富なカラーバリエーションを持つことから、どのようなボディカラーにも合わせやすく、さらにスポンサーカラーに彩られたマシンにも合わせることができる。サイズ設定を20インチと21インチとしているのは当然だが、リム幅は8.5Jから13.0Jまで、インセットは41から70までとなっているため、ドライバースタイルによってセッティングを变えるなど、さまざまにアプローチができるようになっている。ちなみに重量は、20×9.0J 51で8.77kg、21×12.0J 70でも10.77kgと、非常に軽い。

レースに勝つためのホイールをつくり続けているOZが、あえて「究極」というネーミングを授けたのが、ウルティメイト・マグネシオとウルティメイト・アル。最新の解析技術を活かして設計し、最新の生産技術でつくったそのフォルムは、一見すると優しささえ感じてしまうほどに美しい。

しかしその中に潜んでいるのは、野生の獣が獲物を狩るときに見せる、無駄のない動きに共通する躍動感。究極の911に相応しいアイテムといえるだろう。

Ultimate Magnesio (2024年モデル)

991 GT2 RSとGT3 RS専用モデルとして登場した「Ultimate Magnesio」、フロント用として20×9.5J 50を、リヤ用に21×12.5J 48というサイズを用意している。切削加工で軽しいマグネシウムを素材としながらも、スポークサイドのカットやエンド部、股部のリブ形状など、ギリギリまで軽量化をしながら強度を保つ工夫が施されている。カラーバリエーションはグリジオ・コルサ・プライトのみ。サーキットでタイムを削るということのみを考えてつくられた、至高の存在といっているアイテムだけに、人気となること間違いなし。手に入れたオーナーは、まさに幸せ者だ。

モデル	モノブロック
デザイン	センターロック マルチスポーク
マテリアル	マグネシウム鍛造
カラー	グリジオ コルサ プライト



Ultimate Alu (2024年モデル)

マグネシオの研究開発技術や生産工程を活かしてつくられた、6082アルミニウムを素材とする鍛造1ピースホイールが「Ultimate Alu」。カラーバリエーションはマグネシオと同じグリジオ・コルサ・プライトのほか、マットブラック/グロスブラック/レースホワイト/スターグラファイト/マットブロンズ/レースゴールド/ホワイトゴールドの8色が用意されている。軽さに関しては、さすがにマグネシオにはかなわないが、それでも世界トップクラスの軽さだ。インセットによっても違いますが、20×9.0Jは8.77kgから8.95kg、9.5Jで8.97kgから9.11kg、21×11.5Jは10.51kg、12.0Jでは10.71kgから10.77kg、12.5Jは10.87kgと、非常に軽い。

モデル	モノブロック
デザイン	5ホールの、センターロック マルチスポーク
マテリアル	アルミニウム鍛造
カラー	グリジオ コルサ プライト/マットブラック/グロスブラック/レースホワイト/スターグラファイト/マットブロンズ/レースゴールド/ホワイトゴールド

PICK UP BRAND
OZ
RACING

モータースポーツ由来のOZのホイールは、性能の高さだけでなくそのデザイン的な美しさも高く評価されている
ウルティメイトほどの性能を求めず、もっと気軽に911の足元を演出するOZ製のおすすめアイテムを4タイプ紹介しよう

文＝塩見 誠



911の足元を美しく引き締めるOZホイール

Superforgiata



OZホイールのハイパフォーマンスなDNAが組み込まれた最上位モデルとなるホイール。軽量化、高剛性、高強度のバランスを高次元で実現し、ハンドリングの向上に寄与している。また、F1で培ったテクノロジーにより、レーシングホイールと同レベルの製品に仕上がっているのもポイント。さらに、鍛造時材に適用されたHLT技術により、高性能鍛造アルミニウムは航空機レベルの強度でありながら、重量の大幅低減に成功している。

モデル	一体鍛造
デザイン	マルチスポーク
製造プロセス	鍛造＋フローフォーミング
マテリアル	アルミニウム
カラー	セラミック ポリッシュ/グリジオ コルサ/マットブラック

Leggera HLT



レースの世界で鍛え上げられた最高レベルのバランス、剛性、軽量性を誇るオープンスポークのホイール。鍛造に匹敵する剛性と柔軟性を実現した、フローフォーミング製軽量インナーリムを採用。スポーク性能重視でスパルタンになりがちなりアルスポーツのスタイルに、運動感あふれるアスリートフォルムを取り入れている。磨き抜かれたまじりの本質にアスリートの美しさをプラスしたホイールは、OZの技術と美学の結晶である。

モデル	一体鍛造
デザイン	5ダブルスポーク
製造プロセス	低圧鍛造プロセス＋熱処理＋フローフォーミング
マテリアル	アルミニウム
カラー	グリジオ コルサ ブライト/グロスブラック/レースゴールド

Ultraleggera HLT

F1で鍛え上げられた技術が注入された大口径ハイパフォーマンススポーツモデル。OZのF1テクノロジーでもある「6ベアスポーク」を継承し、軽量化と高剛性という高性能だけでなく、スタイルにおいても美しさを追求したレーシングスベックのモデル。さらに、鍛造に匹敵する強度を誇るフローフォーミング製軽量インナーリムにより、完璧なまでのスポーツパフォーマンスに磨き上げられたホイールに仕上がっている。



モデル	一体鍛造
デザイン	6ダブルスポーク
製造プロセス	低圧鍛造プロセス＋熱処理＋フローフォーミング
マテリアル	アルミニウム
カラー	マットブラック

Formula HLT

OZはF1において数々のチームとパートナーシップを結んでいるため、OZの技術と伝統から創造された先進のホイールエレメントが、そのままストリート用にフィードバックされている。10スポーク・テック・テクノロジーが生み出す世界最高峰の軽量性と剛性は、これまでのレースでの戦歴が証明するところ。革新的な「センターロック・カバー」がF1クオリティに磨きをかけ、レプリカホイールとしての最高のパフォーマンスを発揮する。



モデル	一体鍛造
デザイン	10スポーク
製造プロセス	低圧鍛造プロセス＋熱処理＋フローフォーミング
マテリアル	アルミニウム
カラー	グリジオ コルサ/マットブラック/レースゴールド



闘うボルシェが使うホイールは「OZ」

WECの2023年シリーズを闘うボルシェ963
その足元にはOZのホイールがセットされていた
そこで見渡すと、参戦車両のOZ装着率はかなり高い
OZとモータースポーツの歴史を振り返ってみよう

文＝塩見 誠



WECの耐久レースは非常に過酷。しかも市販モデルに近いホイールであるため、多くのノウハウがフィードバックされる。レースを知り尽くしたOZのホイールは、こうした世界トップクラスのレースで鍛え上げられているのだ

クルマは1960年代後半から70年代にかけて大きく進化した。エンジンの出力は高まり、それに伴ってボディ剛性やサスペンション構造などの新機軸が生み出され完成度が大きく高まった。モータースポーツの世界では1000分の1秒単位で速さを競うために、レーシングチームは勝てるパーツを血眼で探し、パーツメーカーもその期待に応える製品を日進月歩でつくり続けた。現代に続く名のあるパーツメーカーの多くがこの時代に創業されているのは、そんな時代背景があった。まさにOZはこうした時代に生まれたブランドのひとつである。

1971年、イタリア北部ベネト州でシルヴァーノ・オセッラドレとピエトロ・ゼンというふたりの若者によってOZは創

業された。ラリー好きだったオセッラドレとゼンは、ミニ・クーパー用のホイールを開発。強靱さと軽さを持ったこのホイールは、ミニ・クーパーに数多くの勝利をもたらした。
1984年にはレーシングホイールを専門に開発するOZレーシングを設立。マグネシウム素材とアルミニウム合金を採用した2ピースホイールをF1に供給した。その後もF1を始めとしたフォーミュラやツーリングカーレース、WRCやWECなど、世界を舞台に闘うレーシングチームに、勝利するためのホイール供給を続けている。

2023年のWECシリーズでハイパーカークラスに参戦しているボルシェ・ペンスキー・モータースポーツのボルシェ963が装着しているホイールは、OZ製

だ。そのほかのクラスに参戦しているマシンの多くも、OZ製ホイールとともにシリーズを闘っている。ル・マン24時間では、LMP2クラスのすべて、トヨタ以外のLMHクラスはすべてOZのホイールを装着しているほどである。

このようなレースに勝つための活動から得られた技術やノウハウは、市販車用ホイールの開発にも活かされている。直近の例では、エアロフラップシステムを採用したSuperturismo AEROが、F1用ホイールの空力解析から生まれたもので、さらに実戦でのフィードバックから完成に至っている。そのノウハウを市販車用として活かしてリリースされたものだ。

OZは、ただ美しいだけではない機能の裏付けによって、すべてのプロダクトを生み出しているのである。

モータースポーツとともに進化を続けるイタリアンホイール